

調査報告書

委員会名	厚生常任委員会
派遣委員	4名
調査目的	厚生常任委員会所管事務調査のため
行先及び調査事項	郡山市：郡山市元気な遊びのひろば（ペップキッズこおりやま）について 社会福祉法人こころん：農福連携の取り組みについて
日程	平成30年11月5日（月）～6日（火）
報告事項	別紙のとおり

◇ 報告事項

○ 福島県郡山市

郡山市元気な遊びのひろば（ペップキッズこおりやま） について

郡山市元気な遊びのひろば（ペップキッズこおりやま）



1 視察内容

(1) 概要

ペップキッズこおりやまは、東日本大震災の原発問題により外遊びが制限され、運動不足やストレスを抱える子供たちの運動不足解消やストレス発散、また子供たちの体力増進を図ることを目的に、平成23年12月に開設された東北最大級の屋内遊び場である。

(2) 経緯

平成23年9月、株式会社ヨークベニマルから市に対して、常設の屋内遊び場を共同で作らないかとの提案があった。そこで、同社所有地の上に建つ同社所有の建物及び設備を同社が改修し、市が無償で借り受けるかたちで同年12月にペップキッズこおりやまを開設した。

(3) 施設概要・施設運営

- ・ 面積：約 1,900平方メートル
- ・ 実施主体：郡山市（施設管理）

平成26年度から認定NPO法人郡山ペップ子育てネットワークに運営を委託している。

- ・ 休館日：第3水曜日とその翌日、年末年始
- ・ 開館時間：午前10時から午後6時まで
- ・ 利用料：無料（ペップキッチンを除く）
- ・ 施設内は3つのエリアに分かれている。

①アクティブエリア

屋外サーキットやボールプール、ランニングコースなど、体を使って遊べる遊具やコーナーが多く備えられている。



▲ ランニングコース

震災時に外で思い切り走れなかったことから整備された。人工芝が敷かれている。



◀ 屋内砂場

ガラスで囲まれている。

②コミュニケーションエリア

ままごとコーナーや読み聞かせスペース、18カ月までの乳児専用スペースなどがあり、親子がゆっくりと会話をしながら楽しむことができる。



③学びのエリア

子育てに関するセミナーや教室を開催するセミナー室や実際に料理ができるペップキッチンがある。



▲ ペップキッチン

食べることの大切さや料理を作る楽しさを学ぶことを目的に、食育講座、調理体験、試食を行うクラスを1日3回開催している。2歳から12歳までの子供が対象で、材料費として1人300円が必要。



▲ 案内版

イベントや教室等の案内が掲示されている。

(4) 説明内容等

- ・ 民間の力が大きく働いたこと、また原発問題により屋外遊びが制限されていたことから、3カ月という短期間での整備が実現した。
- ・ 開設当時に設置された遊具や物品のほとんどが、企業からの寄附である。
- ・ 来館者数は一日平均 935人である。
- ・ 事業費は年間約 9,000万円（運営委託費約 6,000万円、維持管理費約 3,000万円）で、財源は被災者支援総合交付金（国費 10/10，復興庁）。
- ・ 復興庁が平成32年に閉鎖される予定であり、それ以降は被災者支援総合交付金による全額補助は受けられない可能性がある。
- ・ 今後、財源の確保が課題となるが、年間約33万人の来館者があり、利用者からは満足しているとの声が多いため、施設を廃止するつもりはない。
- ・ 利用料徴収についてはシミュレーションを実施したこともあるが、開設の経緯もあり、利用料徴収については検討中である。

2 質疑応答

Q スタッフは何人いるのか。

A 現在20数名であり、直営のときよりも増加しているが、職員数は契約条件となっておらず、市から求めたものではない。

Q 6,000万円という運営委託費はかなり高額だと思うが、どうか。

A 人件費や遊具の交換に経費がかかっている。ペップキッズこおりやまは遊具が多く、1年に1回交換が必要なものもある。

※ 郡山市子ども総合支援センター「ニコニコ子ども館」についても視察を行いました。

郡山市子ども総合支援センター「ニコニコ子ども館」

1 視察内容

(1) 概要

ニコニコ子ども館は、保健、福祉、教育の総合的な子育て支援を行う場として、また、雨の日に親子が安心して利用できる場として、平成21年4月に市役所に隣接して整備された子育て支援の拠点施設である。

(2) 施設概要

- ・敷地面積：6103.94 平方メートル
- ・建物面積：4963.96 平方メートル
- ・地上6階地下1階建て
- ・駐車場：110台収容
- ・開館時間：午前8時30分～午後6時
- ・休館日：毎月第3土曜日とその翌日、年末年始
- ・設備

1階（ニコニコ遊びのフロア）

- ◎ファミリーひろば・・・保育士が常駐する親子の交流広場
- ◎子育て支援室・・・一時保育の受付や子育てに関する情報提供を行う。
- ◎ファミリーサポートセンター
- ◎談話コーナー
- ◎プレイルーム
- ◎ニコニコひろば（屋外）・・・からくり時計や日時計がある芝生の広場



▲子育て支援室



▲プレイルーム

2階（こどもの健康と福祉のフロア）

- ◎管理・給付窓口
- ◎母子保健窓口
- ◎多目的ホール
- ◎情報展示コーナー
- ◎一時保育室

対象児童：生後4か月から修学前まで
保育時間：午前9時から午後5時30分まで



▲多目的ホール



預かり時間：1回4時間30分まで

金額：1回500円

3階（ニコニコ体験活動フロア）

◎サンサンひろば（屋外）・・・屋上にある広場。親子で自由に遊ぶことができる。

◎ボランティア活動室

◎ふれあい交流室・・・不登校児童等の交流の場

◎研修室 等

4階（ニコニコ親子学びのフロア）

◎子育て図書館・・・絵本や育児書がそろっている。声を出して本を読むことができる。

◎おはなしの部屋・・・保育士やボランティアによる読み聞かせが行われる。

◎キッズシアター

◎運動体験コーナー

◎事故予防モデルルーム・・・家庭における乳幼児の事故の予防ポイントを展示している。



▲子育て図書館



▲運動体験コーナー



▲事故予防モデルルーム



5階（こどもの相談と教育支援のフロア）

◎ふれあい学級・・・不登校児童，生徒への支援を行う。

◎総合教育支援センター・・・不登校や発達障害等の相談・支援窓口

◎すこやか学級・・・学校不適応児童・生徒への個別指導を行う。

◎こども家庭相談室・・・専門の職員が子供や親等からの相談や教育相談に対応する。

(3) 説明内容等

- ・ 共済組合の閉鎖したホテルを12億円（うち3億9,000万円がまちづくり交付金）で買い取り整備した。
- ・ 開館前は、既存の地域子育て支援センターの実績をもとに1日当たりの来館者数を300人程度と見込んでいたが、現在の1日当たりの来館者数は約710人である。
- ・ 防災拠点施設にもなっている。
- ・ 運営費は、今年度当初予算で約7,000万円である。

2 質疑応答

Q 利用者に最も人気のある設備は何か。

A ファミリーひろばとプレイルームに遊びに来る親子が多い。

また、一時保育も大変人気があり、ゼロ歳児は1日に5人までしか預かれないため、すぐに枠が埋まってしまう。

Q 駐車場は足りているのか。

A 周辺にある野球場等の利用者が駐車場を使用するため不足している。立体駐車場を整備することも検討したが、費用面から断念した。

Q 運営費の7,000万円は、主に人件費か。

A ファミリーサポートセンターの委託費の中に一部人件費が含まれているが、維持管理費と事業費が主な内容である。ニコニコ子ども館では、移動サロンや子育て講座、リズム遊びなどのイベントを団体に委託して定期的を開催しているため、事業費として3,000万円程度を確保している。

意見・感想等

- ・ ペップキッズこおりやまについては、原発事故の問題が事業を後押ししている面もあるため、本市においては、民間の取り組みに注目していきたい。
- ・ ニコニコ子ども館は、ゆとりある空間で保健・福祉・教育の相談や支援窓口が連携しながら対応できることで、保護者はワンストップで活用できる点が素晴らしいと感じた。
- ・ ニコニコ子ども館は、教育委員会の不登校対策を担う部署やDV、虐待問題を扱う部署も配置されており、組織的にも横の連携がスムーズになる体制となっている点は、本市も参考にすべきである。
- ・ 本市にも子育て支援拠点施設は整備されているが、保育園併設となっているため、子供を思い切り遊ばせられる環境という意味では不十分である。施設の充実や土日の開設が望まれる。

社会福祉法人 ころん (福島県 泉崎村)

農福連携の取り組みについて

1 社会福祉法人ころんについて

(1) 事業内容

地域活動支援センター I, 相談支援事業, 居宅介護支援事業 (ホームヘルプサービス), 就労移行支援事業, 就労継続支援 B 型事業, 就労継続支援 A 型事業, 共同生活援助事業

(2) 事業所

○生活支援センターころん：地域活動支援センター

運動療法や民間からの下請け作業, 日常生活支援等を行う。

○ころんファーム：約 1.5ha の農地と 2 棟のハウスがあり, 約 50 品目の野菜を栽培するために就労移行支援と就労継続 B 型の利用者が作業に当たっている。

〈平成 28 年度実績〉

- ・農地面積：16,676 平方メートル
- ・利用登録者数：10 名
- ・売上実績：3,491,671 円
- ・平均工賃：32,242 円
- ・販路：ころんや, 泉崎給食センター, J A 夢みなみ, 矢吹病院等

○直売・カフェ・ころんや：直売場では, ころんファームや近隣農家が栽培した農産物等を販売している。カフェでは, 直売場で販売している野菜を中心としたランチメニューやスイーツを提供している。就労支援事業の 1 つとして 15 名程度が利用登録している。

※ その他, 養鶏場やお菓子作りの工房, グループホームなどがある。

2 視察内容

農福連携とは・・・

農業サイドと福祉サイドが連携して農業分野で障害者の働く場をつくろうとする取り組み。

農福連携には, 農家が障害者を雇用する, 障害者福祉施設が自ら農業を始める, 農家が障害者福祉施設に農作業を委託するなどの形態があるが, 社会福祉法人ころんでは, 自ら農業を始め, 障害者に就労の機会を提供するとともに, 他の農家での施設外就労も行っている。

- ・ 利用者の多くを占める精神障害者の方たちが自立して地域で生活するためには, 生活習慣を整え, 体力を付ける必要があると考えた。加えて, 泉崎村の農村という環境を生かすため農業を始めた。
- ・ 農業は, 工芸品等とは違い消費後にまた買ってもらえる, 誰でも手軽に始められる, 作ったものの販売や加工などの展開があるなどの利点がある。
- ・ それぞれの能力に合わせた仕事を用意するようにしている。
- ・ 移行支援事業で働く上でのマナーなどを学び, 毎年 2～3 人が一般就労に移っている。
- ・ 東京オリンピックでは, 農福連携の農産物を選手村の食品調達に活用することになっているため, 近年, 農福連携に対する期待が高まっている。

- ・ 選手村で提供される農産物には、GAP認証を取得していることが要件となっている。福島県は、GAP取得に関する予算が多く確保されており、それを利用してGAPの申請中である。
(注) GAPとは、農業において食品安全、環境保全、労働安全、人権保護、農場経営管理に関する取り組みを確認し、より良い農業経営を実現しようとする取り組み。GAP認証を取得するためには、審査員による取り組みの評価が必要。
- ・ 全国の福祉事業所の約40%が農業に取り組んでいる。
- ・ 泉崎村は観光資源や産業が少ない地域だが、農業はしやすい地域なので、今後、農業が資源になり得るのではないかと考えている。



▲ 養鶏場



▲ ころんファームのビニールハウス

▲ 生活支援センターころん

3 質疑応答等

Q 29年度の工賃の平均額が、前年度と比較して約1万円低くなっているようだが、理由は何か。

A 利用者数の変動によるものである。

なお、就労継続支援A型事業における平均工賃は約9万円で、利用者は9名である。できるだけA型の人をふやして、能力のある人にはそれに見合った賃金を支払うようにしている。

Q 安定的に賃金が得られることは、障害者の方が外へ出る意欲につながるだけでなく、本人や家族にとっての生きがいにもなると思う。事業がきちんと成り立っているからこそ高い賃金を支払うことができているのだと思うが、どのような点が成功につながっているのか。

A 障害者の施設の中には、自分たちで作ったものを施設のなかで消費するところも多く、そういったところは、あまり消費者を意識していない。消費者のニーズにあったものを作るためには、特別な価値が必要になる。ころんでは、手間をかけて、良いものや安全なものを丁寧に作ることを心がけている。そういうものは障害者の人たちだからこそ提供できるものだと考えており、取り引きも少しずつふえてきている。

4 意見・感想等

- ・ 労働を安く請負うという従来型の作業所事業ではなく、新しい価値と賃金を生んでおり、働くことが安全な食材の提供につながり、地域に喜ばれ、自らも食べることを通して生活習慣を整えることになっていた。
- ・ 産業の少ない農村地域でありながら、農福連携により、作業所工賃として平均3万円を確保し

ている点は非常に勉強になる。高知市でもできる条件はあると思うし、必要な取り組みだと思う。事業所が成立つための行政のサポートのあり方や、行政側に求められている具体的支援策などについて、もっと聞きたかった。

- 高知県下でも少しずつ農福連携事業が広がりつつあるが、地域に根ざした社会福祉法人こころんの活動は、これからの未来や可能性を大いに感じた。障害者といっても千差万別であり、個性や能力に応じて農作業ができる点、体力回復やリハビリにもつながる点、手軽に始められること、加工食品など商品開発の可能性、直販所などでは人とのふれあいを通じて社会マナーを習得できる点など、良い点が多いと感じた。
- 最低賃金以上で仕事を受けることによって処遇改善が図られている点や、一般就労につながっている事例が多いことも特徴であり、参考となる点が多い。本市でも農業のポテンシャルは遜色ないことに加え、林業や6次産業での就労など可能性を探っていきたいと感じた。
- 農福連携を通り越し、農福商工連携に取り組んでおり、農業あるいは商工サイドから社会福祉法人への連携のためのアプローチや、社会福祉法人から農商工サイドへのアプローチを仲介する場や組織が求められていると感じた。その役割は、県や市町村に果たしてもらいたい。